

介護におけるエンパワーメントと自立支援のあり方は何か

提言

人々の参加が盛んな地域ほど元気である。
ゼロ次から3次までのエンパワーメントと自立支援を実現しよう。

登壇者

【進行役】	中村 秀一氏	(一社)医療介護福祉政策研究フォーラム理事長
	石山 麗子氏	国際医療福祉大学大学院教授
	河田 圭子氏	地域の茶の間創設者/支え合いのしくみづくりアドバイザー
	熊谷 美和子氏	(特非)たすけあい平田理事長
	近藤 克則氏	千葉大学予防医学センター 社会予防医学研究部門教授
	松井 一人氏	(公社)日本理学療法士協会理事

■ 寄せられた声から

- 自主型の老人ホームです。お元気な高齢者が地域に出ていき、助け合い支え合いに参加できるよう施設内のしくみ作りをしています。いきがいをもって生きることこそが介護予防にもつながることを入居者に教えています。500人お住まいの施設の中で、今ようやく13人のボランティアをはじめの人たちが生まれてきました。町づくりまではなかなかすすんでいかないと思いますが、包括職員の方たちと連携しながらやっていきたいと思っています。

■ 議事要旨 中村 秀一氏

各登壇者からの発表、討議、フロアからの質疑、まとめという形で進行した。

近藤克則氏（千葉大学予防医学センター教授）からは、「プラスを引き出すエンパワーメント」と「マイナスを防ぐ予防」について、さらに、エンパワーメント・予防エンパワーメント・予防の「ゼロ次」、「1次」、「2次」、「3次」についての概念の説明があった。その上で、「社会参加10%多いと認定率2~5%低い」、「地域参加と自殺率」など具体的なデータを掲げ、ゼロ次予防エンパワーメントと自律支援を目指すまちづくりの必要性が指摘された。

熊谷美和子氏（NPO法人たすけあい平田理事長）からは、1992年から開始された（旧）平田市（現出雲市）における市民同士の助け合い活動の実践報告があった。1994年に仲間を看取る経験をしたことから「地域に住むもう一人の家族」として有償ボランティア活動が行われてきた。現在、メンバーの8人がケアマネの資格を持ち、2016年には私募債で活動拠点を確保している。「たすけあい平田のサービスに支えられながら自分の望む自立した心豊かな生活が実現した事例」、「役割を得ていきいきとした事例」が紹介された。

河田圭子氏（地域の茶の間創設者、支え合いのしくみづくりアドバイザー）からは、1990年に有償助け合い事業を開始、2003年に空き家を利用した常設型地域の茶の間「うちの実家」を開設し、2014年新潟市の基幹型の地域包括ケア推進モデルハウス「実家の茶の間・紫竹」

を設置した経緯とその活動の紹介があった。「実家の茶の間・紫竹」は新潟市が8行政区に設置する「地域の茶の間」（居場所・通いの場）の第一号である。地域での長い実践が自治体の施策になるまでの成果を上げた事例である。

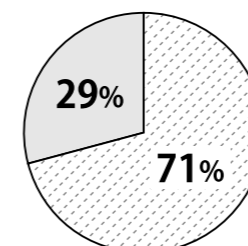
松井一人氏（日本理学療法士協会理事）は、（株）ほっとリハビリシステムズ代表取締役で、福井県を中心に8事業拠点で事業を展開している。理学療法士として、「従来のお世話型介護」ではなく、評価と目標設定を重視した「自立支援型介護」を実践している。「利用者の自己管理能力を向上させるメニューの稼働」、「自治体と提携し、介護保険制度からの修了を可能とする街づくり」、「介護予防をプラットフォームにした街の活性化モデル」に取り組み、地元の越前市では要介護認定率が低下し、第7期の介護保険料は据え置きとなっている。

石山麗子氏（国際医療福祉大学大学院教授）は、尊厳の保持・自立支援とエンパワーメントの関係性について整理された。エンパワーメントと自立支援のために求められるケアマネジメント機能は、「サービスの連絡・調整」から、「人への働きかけ」へ、さらに「社会資源の改善・開発」に向かうべきであると指摘した。

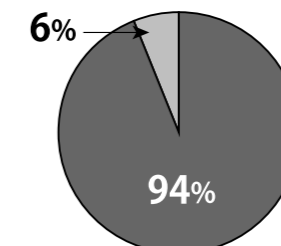
以上の分科会の議論を踏まえ、当分科会の提言として「人々の参加が盛んな地域ほど元気である。ゼロ次から3次までのエンパワーメントと自立支援を実現しよう」とまとめた。

アンケートの結果 参加者概数：113名 回答者数：93名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方

